

日本諸語および諸方言記述のためのグロスリスト作成の試み¹

大槻知世

キーワード： グロス 日本諸語 日本語諸方言

要旨

日本語および諸方言の研究において、先行研究による蓄積と現在の日本語学および方言学研究の成果を結合させ、さらに方言学と一般言語学を架橋する試みとして、記述に必要なグロスの整備を進めるべく、現在話し合いがなされている。本稿は、その途中経過を報告するものである。

1 はじめに

日本語諸方言の研究では、その研究史の早い段階から記述の重要性が認められ、話者の談話を記録し、音声を書き起こした談話資料を保存する実践が行われてきた²。こうして残された談話資料は、今では観察できなくなった言語現象や、往時の伝統的な方言のすがたを今日に伝えている。さらに、年代別の談話資料を採って比較することで言語変化を追ったり、異なる方言の談話資料を比較することで通方言的な研究をしたりすることも考えられる。要するに、方言学においては記述が全ての研究の基礎といっても過言ではない。

しかしながら、通言語的な観点から見ると、談話資料の多くは形態素分析がされておらず、どの形態素がどういった意味・機能を担うかが明瞭ではないなどの問題点が指摘されている。

現代日本語共通語（いわゆる標準語。以下、共通語とする）が全国に浸透している今、各地の方言を残そうと方言が見直されつつある。その動きの中で、保存のための記述の必要性が再び認められている。しかし、従来型の談話資料を次世代の研究者や方言の学習者が利用しようとするとき、先の問題点が障壁となることが予想される。読者の理解を助ける方策が必要であり、そのための試みの一つが、本稿で紹介するグロス（本稿では形態素の意味・機能のラベルを指す）作成である。現在、記述言語学の枠組みを応用した調査研究が特に進んでいる琉球諸語を中心に、日本語および諸方言の記述に寄与するグロスリストを整備するために、専門家間での話し合いがもたれている。

2 作成の方針と問題点

本章では、グロスリスト作成時の話し合いで確認された方針を紹介するとともに、その場で浮かび上がった問題点を述べる。

¹ 科研基盤 A「琉球語の共同研究における記述の枠組みとグロスづけの試み」（代表：琉球大学教授 狩俣繁久）による。なお、本稿における記述の誤りは、言うまでもなく筆者の責任である。

² 音声データの保存も、録音・保存メディアの発達とともに活発に進められてきた。

2.1 作成の方針

まず、方言を記述する際は、形態素境界、形態素ごとの意味・機能、共通語訳等の異なるレベルに属する情報を分析的に示すために、複数の行を設ける。基本的には次のような3段方式を用いる³（下地 2013：4）。

- (1) 1行目：形態素境界入りテキスト（イタリック）
- 2行目：グロス（形態素ごと）
- 3行目：全文訳

本稿で取り上げるグロスとは、2行目に記される形態素の意味・機能の情報のことである。グロスリストを作成する際の基盤とされるものは、第一に Leipzig Glossing Rules（以下、LGR）である。ただし、LGR のグロス式だけでは、日本諸語・諸方言のもつ多様な形態素の意味・機能のラベルを賅うことができない。そこで LGR に無いラベルを補うために Lehmann (2004) によるグロスリストを参照する。以上の二つは言語記述において通言語的に用いられるラベルを与えてくれるが、日本諸語・諸方言に固有の形態素の意味・機能に対応しうるラベルが用意されていないことも少なくない⁴。これについては、まず LGR, Lehmann の一覧の中で当該の意味・機能に準ずるラベルがあるかを検討するが、無ければ話し合いで研究者間の意見をすり合わせて適当なグロスを作ることが決められた。今後、日本諸語・諸方言の記述に必要なグロスを補う目的で、Shibatani (1990 [1998]), Frellesvig (2010)等⁵を参照する予定である。

LGR と同じく、日本諸語・諸方言の記述においてもグロスは基本的には意味・機能に基づいて振る。つまり、「動詞」「名詞」や「助動詞」といった文法カテゴリはグロスには用いない。

2.2 問題点

現状では、記述を行う研究者によって、用いるグロスおよび用語にバラつきがある。例えば、琉球諸語の研究の中でも、南琉球諸語と北琉球諸語とでは、同じと思われる意味・機能に異なる用語・グロスを用いていることもある。事は単に略号やグロスだけの問題だけではなく、各研究者が当該の形態素の意味・機能どのように解釈するかという問題に行き着く。

また、意味・機能が具体的に分かっていない形態素も少なくない。以上の問題点から、本当に必要なグロスのセットを洗い出すことは容易ではない。

³ 記述対象の言語が消滅の危機に瀕しており資料の保存に緊急を要する場合や、分析を待たずに記述が優先される場合などには、形態素分析を省いた例文の音素表記、グロス、全文訳の3行から成る簡易3段方式もある。

⁴ ある種の意味・機能を担っていると考えられる動詞の活用形、具体的には連用形やいわゆる「きれつづき」、さらにテ形に付すグロスをどうするか、といった問題が挙げられる。

⁵ この他、Martin (1978, 1988, [2004]), Iwasaki (2003)がある。

3 解決案

先の 2.2 の一点目の問題については、各々の研究者によって同じグロスが振られた形態素を列挙し、それらに共通点があるか否かを確認することで、ある程度統一を図り、完全な一致が難しいものに関しては緩やかな統一に留め、ラベルの内訳に関する詳細は個別の記述に任せるという策が現時点で支持されている。

二点目の問題については、現状では記述が洗練される必要があり、グロス作成の前進と記述の進捗は両輪のようなものと考えられる。

4 まとめ

以上のように、日本諸語および諸方言間で共通のグロスリストを整備する作業が現在進められている。日本諸語・諸方言の間で統一のグロスを用いることによって、研究者間の情報交換が一層活発になることが期待される。さらに、このリストが完成し、運用が進めば、方言学、日本語学だけでなく通言語的な研究にも寄与する可能性が高い。

附録：グロスを用いた記述の例

青森県津軽方言（調査地：南津軽郡田舎館村、話者：70 歳代女性）

- (1) イゴスオン オガサマ
igosuon *ogasama*
 i-gosu=on oga=sama
 良い-POL=DSC 既婚女性=様
 (まだ時間が早いから) いいでしょうよ、奥様
- (2) ミッカマンデ ヤスミダガ
mikkama'de *jasumidaga*
 mikka-made jasumi-da=ga
 三日-まで 休み-COP=YNQ
 (お正月の) 三日まで休みだっけ？

COP : copula

YNQ : Yes/ No Question

DSC : discourse marker

- : 形態素境界

POL : polite

= : 接語境界

本文 2.1 で紹介した基本 3 段方式の他に、カナによる読みやすさと地元の話者への還元を考慮して行数を増やした上の例のような方法もある。ここでは、基本 3 段方式の上に加えて、1 行目をカナによる方言形の表記、2 行目を準音声的な表記としている。

上の(1)の POL (polite)、(2)の YNQ (Yes/ No Question) は、先行のグロス一覧に無いために

新たに提案されたグロスである⁶。ポライトネスを語彙的・形態的に標示し、肯否疑問文と疑問詞疑問文を形態的に区別するという特徴を明示的に記述するために必要なグロスである。また、(1)の DSC (discourse marker) はいわゆる終助詞に付したが、解釈次第で SFP (Sentence-final particle: 文末詞) を振ることもあり、現時点では個々の判断に任されているものの一つである。

参考文献

- Frellesvig, Bjarke (2010) *A History of the Japanese Language*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Iwasaki, Shōichi (2003) *Japanese*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.
- Lehmann, Christian (2004) Interlinear morphemic glossing. In *Morphology: An Interenational Handbook on Inflection and Word Formation*, vol. 2 Geert Booij, Christian Lehmann, Joachim Mugdan, and Stavros Skopeteas (eds.), pp.1834-1857. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Martin, Samuel (2004) *A Reference Grammar of Japanese*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Max Plank Institute. Leipzig Glossing Rules
(<http://www.eva.mpg.de/lingua/resources/glossing-rules.php>)
- Shibatani, Masayoshi (1990) *The Languages of Japan*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- 下地理則 (2013) 「グロスの基本方針」 科研基盤 A 「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究」 発表資料. 2013年10月7日版.

An Attempt to Prepare a Set of Glosses in the Fields of Studies on Japanese Languages

Otsuki Tomoyo

Keywords: Gloss, Japanese Languages, Japanese Dialects

Abstract

In the fields of Japanese dialects research, an attempt to make a gloss list is now made ahead. The experts working on this attempt expect the list to contribute to combining the knowledge in the fields on Japanese Languages and to filling in the gap between the study on Japanese languages and the general linguistics.

(おおつき・ともよ 東京大学大学院博士課程)

⁶ polite は Lehmann の一覧に挙げられているものの、グロスとしては FRM (formal) に一括されている。しかし日本語研究では、ポライトネス研究の盛行から、「フォーマル」よりも「ポライトネス」を用いる慣習ができていくことが窺える。このため、日本諸語・諸方言のグロスとしては POL (polite) が適当であると筆者は考える。